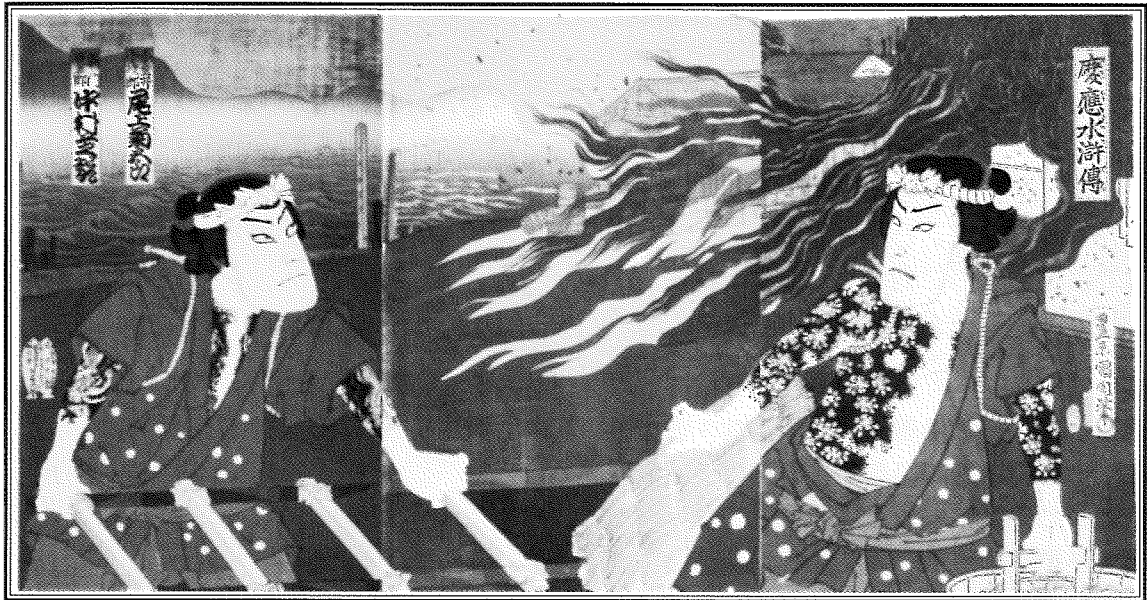


# あるむぜお95

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 95

2011年3月20日



豊原国周画「錦絵 慶応水滸伝」(当館蔵)

## 目次

1-2 府中宿に△がやってきた！

### ④囚人護送

3 展示会案内

特別展 アウトローたちの江戸時代

4-5 ノート 下河原線の跡を求めて

6 博物館で生物多様性を知る！

### ④生物多様性の危機

7 最近の発掘調査

国司館が管理した土器

8 収蔵資料あれこれ ギフチョウのコレクション

小金井小次郎は、府中の親分・藤屋万吉に見込まれて、博徒の世界に名を広めました。また、府中宿で妻に玉川屋という旅籠を営ませるなど、府中と関係の深い侠客です。

1882年(明治15)に、2代柳亭種彦が小次郎を主人公とした『落花清風慶応水滸伝』を著すと、小次郎は講談や浪曲に登場し、歌舞伎でも演じられるようになりました。

上の錦絵は、1894年(明治27)に市村座で上演された「新門辰巳小金井」の一場面を描いたものです。この場面は、江戸の大火が石川島の人足寄場に及んだ際に、小次郎(錦絵右)が町火消の新門辰五郎とともに消火にあたっているところです。

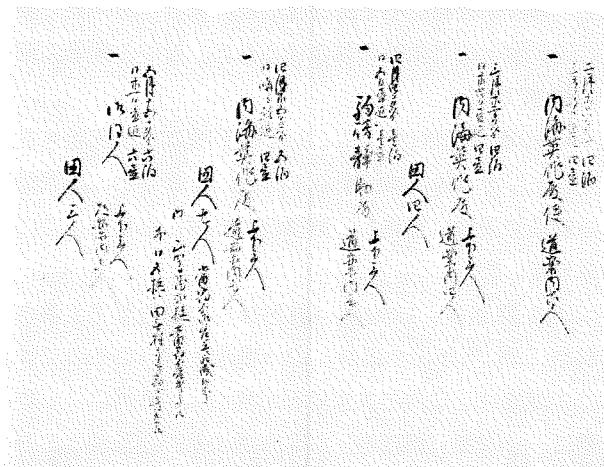
# 府中宿に○△が やってきた!

## ④囚人護送

地域の中心である江戸時代の宿場には、多くの人や物資、情報が集まりました。府中宿にも物見遊山や商用、六所宮（現・大國魂神社）への参詣などさまざまな目的をもった人が訪れました。種々の人々が集まれば当然のことながら、中にはあまり歓迎できない面々も含まれていました。どのような人々が訪れ、府中宿ではどのように対処していたのでしょうか。今回は、4回シリーズの最終回です。

府中に残る江戸時代の古文書の中には、囚人の預かりについて記されているものがあります。囚人を連れてくるのは、関東取締出役等の役人、預かる場所は、宿内の旅籠屋か圈…といっても、よくわからないことと思います。まず、関東取締出役について説明しましょう。

関東取締出役は、文化2年（1805）に設置された役職で、支配に関係なく、関東一円の博徒（博奕を生業とする人）の横行や、無宿（江戸時代に戸籍の役割を果たした「宗門人別改帳」から除外された者）の徘徊を専管で取り締まりました。こ



関東取締出役の休泊と囚人護送にかかった費用の帳面  
(当館寄託)

こで支配に関係なくといったのは、関東の支配体制の特色によります。江戸時代の関東は、幕府領、旗本領、寺社領等が入り組み、支配が錯綜していました。このため、犯罪者が他支配のエリアに逃げ込むと追跡ができず、取り逃がしてしまうことが多かったのです。

この後、文政10年（1827）には、関東取締出役の下部組織ともいべき組合村の設置が関東のほぼ全域に命じられます。この組合村はやはり支配に関係なく近隣の数カ村で小組合を構成し、小組合が集まって大組合となりました。大組合の中心となる村を寄場といい、府中宿は27カ村の大組合の寄場でした。

さて、関東取締出役等が捕えた囚人は、江戸へ送られる途中や、取調べを待つ間、一時的に村々に預けられました。このような囚人の預かりは、組合村を単位として行われ、費用も分担させられました。囚人を江戸に送る際に乗せる山鶯籠や、拘束する縄なども組合村で用意しなければなりません。ただし、囚人が無宿でなければ、囚人の在在所が費用を負担することになっていました。

先程、囚人は府中宿の旅籠屋か、宿内の圈で預かったと記しましたが、ここで圈について少しお話ししましょう。圈は仮牢のことで、天保4年（1833）の触れで寄場への設置が命じられました。この時点で設置する寄場が少なかったのでしょうか、同8年に再度触れ出され、この時に府中宿は圈の設置に関する承諾書を提出しています。

圈の建築費用やその後の修復費用も、やはり組合村の負担となります。金銭的な問題から修復することができず、囚人が逃げてしまった例もあるようです。因みに、逃げた囚人が無宿であれば、やはり探索費用が組合村の負担となりますので、泣き面に蜂、踏んだり蹴ったりとは、まさにこのことでしょう。

最後に、侠客・小金井小次郎の捕縛について、少しお話ししたいと思います。小次郎は、安政3年（1856）に捕まり、三宅島に流されます。その際に、府中宿の宿役人等が小次郎を見逃していたのではないかという嫌疑をかけられ、江戸に行き弁明しています。この出府費用もすべて自分たちで持たなければなりませんから、外部からの囚人を預かる際も、近隣から逮捕者を出した際も、村々にかかる負担は大きかったのです。（花木知子）

# アウトローたちの 江戸時代



三代豊国「木曾六十九駅」のうち「妻籠 法界坊」  
蕨市立歴史民俗資料館蔵

アウトローとはどのような人々のことを指すのでしょうか。もともとの英語のOutlawという意味を考えれば、法 (law) の外 (out) の者、つまり無法者ということになります。ためしに小学館の『日本語大辞典』を引いてみると「無法者。無頼漢。社会ののけもの。」とあり、『広辞苑第五版』には「社会秩序からはみだした者。無法者。」と記されています。

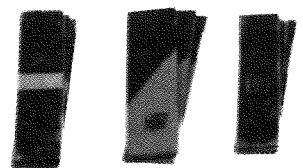
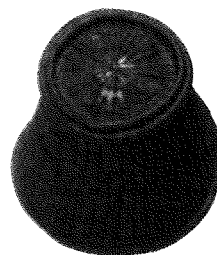
本展示会はアウトローという存在を通して、江戸時代を考察することを目的とします。当時のアウトローというと、<sup>くにさだちゆうじ</sup> 国定忠治や<sup>しみずのじろうちやう</sup> 清水次郎長などの<sup>ぼくち</sup> 博奕を生業とする<sup>ぼくと</sup> 博徒・<sup>きやくや</sup> 侠客や、<sup>にっぽんざえもん</sup> 日本左衛門や<sup>ねづみこぞうじろ</sup> 鼠小僧次郎吉などの盗賊を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。もちろん彼らは<sup>まじ</sup> 紛うこと

2011/4/29祝～6/26日

なきアウトローですが、この他にも江戸時代に戸籍の役割をはたした「宗門人別改帳」から除外された無宿や、仕えるべき主君をもたず流浪する浪人など、様々なアウトローが各地を巡り歩いていました。

また、村などに定住して暮らす人々にとって、外からやって来る虚無僧や旅僧等の宗教者、座頭や瞽女等の芸能民は、異なった価値基準を持つ、自分たちの秩序の枠外にいる存在です。その意味において、村の人々にとっては、このような余所者も、広義に解釈すれば、アウトローであるといえるでしょう。

これらのアウトローは、江戸時代の後期になると増加し、大きな社会問題となります。その反面、歌舞伎や浄瑠璃などに登場し浮世絵に描かれるなど、庶民文化の中でヒーローとして扱われています。このような現象が起こった時代背景や社会動向を、江戸時代の後期の資料にさまざまな形であらわれてくるアウトローの姿から手繰ってみたいと思います。  
(花木知子)



博奕の振り壺 (左) と駒札 (右)  
明治大学博物館蔵



写真1 東京競馬場前駅とホームに停車するチョコレート色の下河原線車両。(1973年)



写真2 東京競馬場前駅前入口から府中本町駅方面を見て撮影。左端の塀の奥は現在集合住宅になっている。右端に見えるのは南武線の電柱。(1973年)

写真撮影：谷口健一氏

### ▼下河原線の盛衰

JR府中本町駅から府中市郷土の森博物館に自転車や徒歩で来館する際は、競馬場や大國魂神社方向ではなく西側の階段を降り、案内板に沿ってサントリービール工場、卸売センターを経由する道が一般的です。しかし、南武線のレール沿いを多摩川方向に300mほど歩き、矢崎町防災公園の手前を右折し、遊歩道を直進、芝間道に出て左折し、三千人塚を経由して博物館にたどりつく方法があります。この時防災公園と芝間道をつないでいる遊歩道は、かつて国鉄下河原線の線路とその終着駅「東京競馬場前」駅の構内だった場所です。日鋼町から南町までの府中市の南北と、その途中から防災公園にいたる下河原緑道は、かつての下河原線の線路跡を再利用した道なのです（1982年完成）。

下河原線は多摩川から開発資源として採取した砂利を運ぶため、1910年（明治43）に東京砂利鉄道として国分寺と下河原（現在の南町）の間で開通し、1920年（大正9）に国有化されました。1933年（昭和8）に東京競馬場が府中に開設されると、競馬観戦のお客を運ぶため、競馬場

に近い場所まで下河原線に支線が引かれ、「東京競馬場前」駅が設置されました。その翌年には電化され、競馬開催日に臨時列車が運行されるようになりました。南武線はまだ南武鉄道という私鉄でした（1944年に国有化）から、省線（1920～49年までの鉄道省管轄鉄道。後の国鉄。現在のJRに相当）に乗って競馬場まで行けるようになったわけです。京王線の府中競馬正門前駅はもっと後の1955年（昭和30）の開業ですので、府中本町駅よりも至近にあった東京競馬場前駅は、競馬場へのアクセスでもっとも便利でした。

戦前、国分寺から富士見信号所（現在の北府中駅）までの通勤輸送（1940年操業開始した東芝府中等の工場職員専用）以外、東京競馬場前までの旅客輸送は競馬開催日の臨時運行のみで、一般旅客運行がスタートしたのは戦後1949年（昭和24）のことでした。競馬開催日には東京駅から臨時直通列車も運行されていました。また、東京競馬場前は当時日本でもっとも長い駅名として知られ、中にはこの駅から日本でもっとも短い名前の駅・三重県の「津」との

間の乗車券を買う方もいたといいます。

その後1965年（昭和40）、その頃にはもはやほとんど行われていなかったようですが、多摩川からの砂利採取が禁止されます。そのため、貨物輸送も少なくなっていました。当時から、競馬開催のない平日の下河原線利用客の大半は、国分寺から東芝府中や日本製鋼（1941～87年の間現在の日鋼町にあった）のある北府中（1956年に信号所から駅に昇格）までの利用でした。これに加え、下河原線が国分寺駅から終点に至るまでに府中街道、甲州街道を踏切で通過するためにおこる交通渋滞の問題や、南武線との乗り換えに数百メートル歩かなければならない不便を解消するため、北府中から府中本町までトンネルを通し、踏切を経由しない路線工事（中央線と立体交差する西国分寺駅設置など）が行われ、1973年（昭和48）4月1日、武蔵野線が府中本町～新松戸間に開通しました。それに伴いその前日の3月31日で、下河原線は旅客運行を廃止しました。残された貨物輸送も1976年（昭和51）9月で廃止となりました。現在、北府中～西国分寺間の一部線路が、武蔵野線に編入され、下河原線の名称は消えたのです。

#### ▼ 廃線以前を語る資料

冒頭に掲げた写真1は、矢崎町防災公園を背にして、府中本町駅方面を見て撮影された、廃止直前の東京競馬場前駅です。鉄道施設は遊歩道となり、ケヤキ並木が続いています。現在、当時の撮影地に立つと、高層住宅が建ち、まったく印象が異なります。

写真2は、東京競馬場前駅出口から府中本町駅

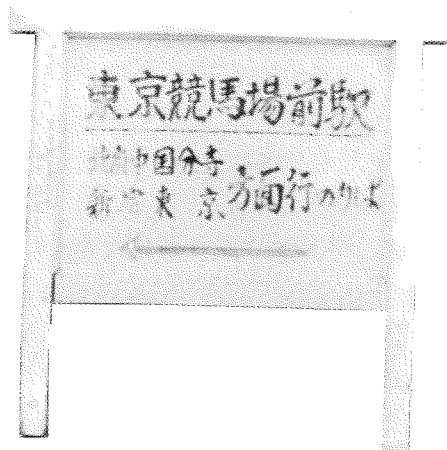


写真3 東京競馬場前駅駅名標（木製） 当館蔵

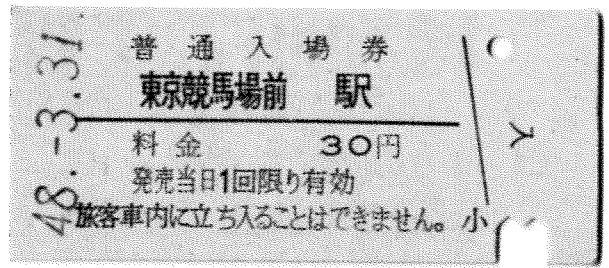


写真4 東京競馬場前駅発行（営業最終日）の入場券

方面を撮影したもので、現在遊歩道になっているところが水路だったことがわかります。そして、まもなく武蔵野線が開通することを予告する横断幕が張られた前で駅員さん（府中本町駅より出向していたそうです）を撮影しています。その背に写っている駅の乗り場案内の看板（駅名標）は、下河原線廃止後に個人の手になつたのですが、後に郷土の森博物館に寄贈されました。この他の下河原線にまつわる収蔵資料としては、芝間第二踏切の看板があり、現在常設展示室の「こども歴史街道」に展示されています。

昨年、当館では企画展「おかしの看板」展を行い、この駅名標を展示しました。それがテレビ放映されたことがきっかけになり、新たに「とうきょうけいばじょうまえ」と記された駅名標、東京競馬場前から1973年3月31日（旅客運送廃止の日）に発行された入場券などが寄贈されました。

廃線跡を整備した下河原緑道の各所には、かつてのレールや枕木をつかったモニュメント等が設置され、鉄道施設の名残をみつけることができます。しかし、下河原線が廃止されてから30年以上が経過し、かつての景観も失われ、人々の記憶も薄れてきているのを感じます。鉄道ファンの間では有名な存在で、最終日に電車に乗った、写真を撮ったという方も多いようですが、府中市内の昭和史を語るものとしても注目し、資料も大切に保管していきたいと思います。

写真5 東京競馬場前駅で使用された平仮名の駅名標（ホーロー製）



# 博物館で生物多様性を知る！

## ④生物多様性の危機

地球上の多種多様な生物を、標本や模型を通じて展示紹介することは博物館の役割だと述べてきました。また、野外観察から生息場所の多様性を学ぶことも紹介しました。最後に生物多様性には、もう一つ大切なカテゴリーがあることを紹介します。それは遺伝子の多様性です。

市内の浅間山にはムサシノキスゲという植物が見られます。高山植物のゼンテイカ（ニッコウキスゲ）と同種ですが、浅間山でのみ生息し、ゼンテイカとは開花時期が異なります。また、かつて多摩川中流域にのみカワラエンマコオロギという昆虫がいました。これは、北海道から本州中部に分布するエゾエンマコオロギと同種のも



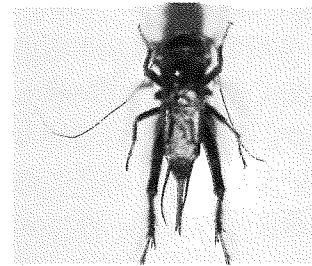
ムサシノキスゲ

のでしたが、多摩川の河原に生息するものの中に、鳴き方のリズムの異なる個体があったのです。この2種は同じ種内に生ずる変種や亜種の例ですが、このように生物は同種間でも生息場所によって異なる遺伝子を持つことがあります。遺伝子にも多様性があることは、当館の観察会等でも、よく話題にしています。

この話をきっかけに、さらに伝えたいのは、生態系の中で地域特有の個体群が絶滅したり、個体数そのものが減少することによって遺伝的多様性が失われているということです。遺伝的多様性の損失は、画一化した形質の集団を生むことで環境変化等への対応能力を減退させ、つまりは、集団が存続できなくなる危険性が増すことを認識してもらいたいです。

遺伝的多様性を脅かし、人為的な生態系破壊を生む例として、昨年末の新聞で、多摩川をアマゾン川に見立ててタマゾン川と皮肉った記事を読みました。熱帯のジャングルを走る河川に住む多種多様な魚種ほどではないにしろ、随分と多摩川にも外来種を含めた外様の魚が増えた

という内容です。本来生息していない種が入り込むことで、一見増えたかに思える魚類の多様性が、実は多摩川の生態系のピンチであることを示唆するものでした。外来生物は、捕食者や寄生者、或いは養分・水・光を在来種から奪う攻撃的な種が比較的多く、在来種は外来種に対して防御的で競争力がないことがしばしばです。多摩川の場合は、放された北米産のブルーギルやブラックバスにより、卵を含めた在来種が捕食されて減少することが懸念されています。この他、タイワンザルとニホンザルの混血、コイやメダカの放流の問題、農業用マルハナバチの野外拡散による在来種への影響、長野県辰野町で観光用に増殖させようと移入した他県産ゲンジボタルが、在来ゲンジボタルの個体減少を招いたとの研究結果もあります。これらの実例のように、人間が異なる地域から種を持ち込み続けるならば、世界中の生態系において少数の種



カワラエンマコオロギ

だけが優勢になり兼ねないのです。このような遺伝子汚染から純粋な在来種を復元する方法は、雑種を完全に駆除する以外に方法はありません。

全ての生物が人類と共存している以上、人の介入は避けては通れない道です。この自然界の実状を踏まえ、生物多様性保護への論議が展開しています。種と生態系と遺伝子の多様性は三位一体、1つの綻びが連鎖的に全てを崩すことを認識し、正しく自然と向き合う姿勢を伝えていくことは、博物館の自然教育にとって必須項目だと考えています。府中は、都市化が進む市街地といった環境です。人の手が加わった自然には、当然多様性の危機が潜んでいます。当館の展示や講座には、そんなメッセージが含まれていると感じ取っていただければ幸いです。（中村武史）

## 最近の発掘調査

# 国司館が管理した土器

美好町一丁目 府中市文化振興課文化財係 荒井健治



前号に引き続き、国司館のお話しです。ただし、今回は最近の調査で見つかったものではなく、1989年（平成元）に調査し、ここで再整理のため倉庫から遺物を出していたところ、墨痕の有る土器に気づき、赤外線撮影を行い、文字が見つかったというものです。

土器は、9世紀の終わり頃から10世紀の前半ぐらい（平安時代）の、高台が付く須恵器碗で、その体部外面に墨で「大目？」と書かれていました。調査当時、文字の存在に気づかなかったのは、土器が煤けており、加えて墨痕が不鮮明であったからです。赤外線撮影により、上2文字は「大目」と書かれていることが判読されました。「大目」は「だいさかん」と読み、国司の官職名の一つです。3文字目付近は特に煤けており、赤外線撮影でもあまり明確に出来ませんでした。しかし、「館」ではないかと思われま

す。出土した場所は美好町1丁目で、以前にこの「最近の発掘調査から」（『あるむせあ』13号）で取り上げた、竈焚き口の天井石を置き去りにしていた竪穴建物跡から出土していました。

ただ、この土器が出土した調査地区や、周辺の調査をみても、国司館を思わせる立派な建物跡は見つかっていませんし、「大目館」と書かれた土器も、都から来た国司が使うような洗練された焼き物ではなく、庶民が用いるありふれた土器です。したがって、出土地点付近が大目館である可能性はないと考えられます。おそらく、出土地点付近が大目の支配下にある工房であるか、大目館で働く人が居住していたという理由で、「大目館」と書かれた土器が、持ち込まれたものと思われま

す。なお、府中第一小学校の国道20号線を挟んだ南側でも、ほぼ同時代のよく似た土器に、よく似た字で「大目館」と同位置に書かれたものが見ついています。今回見つかった墨書の3文字目が「館」であるならば、これらの土器は大目館に属する食器と言え、大目館による館や関連工房で働く人々に対する給食制度が、国府内でも実施されていた可能性が考えられる貴重な土器となります。

## 古代の国司

全国六〇余りの国々は、都から派遣された官僚が統治していました。この官僚を国司といいます。しかし、国司は一人ではなく、国の等級（規模）によって定員が異なっていました。武蔵国は、四つの等級のうち最上位の大国であったため、守、介、大掾、少掾、大目、少目という六人構成でした。今回見つかった大目館は、六名中五番目の国司の館に関わる遺物ということになります。彼らはそれぞれに館を構え、そこを拠点にさまざまな活動をしていました。



連載の「博物館で生物多様性を知る！」でも紹介したように、生物は遺伝的にも多様性を持ち、同種間でも生息地域によって形態の差が生じる場合があります。この多様性が顕著に見られる昆虫標本が、昨年寄贈されました。

その標本は、市内在住の田中啓之氏ご自身が20年かけて全国各地を歩いて採集した国産蝶のコレクションです。ドイツ型標本箱で132箱、約300種に及ぶ努力の結晶は、日本産の蝶をほぼ網羅したものでしたが、中でもギフチョウの収集は特別で、120市町村に及ぶ標本が24箱にまとめられていました。

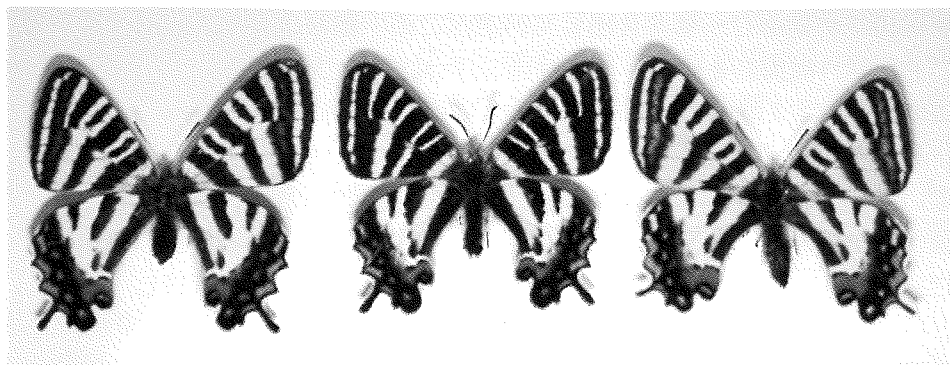
ギフチョウは国蝶のオオムラサキと並んで、日本では代表的な蝶です。日本の固有種で、本州の秋田県南部から山口県中部にいたる26都府県（東京都・和歌

山県では絶滅）に分布します。日本で初めてギフチョウが採集されたのは、1883（明治16）年で、岐阜県農事講習所（後の岐阜県立農学校）の助手・名和靖が、岐阜県郡上郡祖師野村（現在の下呂市）において発見しました。今まで見たことのない種であったため、東大理学部の石川千代松に同定を求めたと言います。ギフチョウの和名は、まさに発見場所に由来するものなのです。

「春の女神」とも呼ばれるギフチョウは、年に一度早春のわずかな間にだけ姿を見せる美しいアゲハチョウの仲間です。長い冬のあと「蝶の季節」のオープニングを飾るにふさわしい華麗な翅の模様と、地域変異で翅の形や模様によって個体差のある面白さも加わって、蝶の中でも愛好家の人気が高い種と言えます。基本的には黄色い地に黒の縞模様という翅のデザインですが、よくよく見ると微妙に違うタイプが混

じっています。地の黄色が強いもの、逆に黒の縞模様が太いもの、また、後翅の周囲が淡黄色の毛で縁取られる型は俗にイエローバンドと呼ばれ、長野県の白馬周辺だけに一定の遺伝確率で発生するものです。違いを探すだけでも結構面白いギフチョウ標本の一点一点をじっくり眺めるだけで、まさに遺伝的な生物多様性の一端を感じ取ることができると思います。

ギフチョウの生息地は、里山や里山に近い落葉樹の林に多く見られます。人の生活自体が農



左から関東型、富士川流域型、白馬型。微妙に違います。

業中心から離れ、里山が減少したことでギフチョウも少なくなっています。ギフチョウは府中市に分布していた記録こそありませんが、昭和30年代までは多摩丘陵に広く分布していました。東京都内では昭和40年代まで高尾山麓に最後の生息地が残っていましたが、その後は姿を消しました。

ギフチョウは保護もさかんに行われていますが、他地域からの移入によって増殖を図ることもあるようです。しかし、この方策はまさに外部地域種の侵略に繋がる遺伝子汚染の元となり、非常に危険な行為です。正しい生物保護を認識してもらうためにも、ギフチョウのような標本の公開は、色々な視点から話題を展開させることが出来る点でも貴重だと考えています。遺伝的多様性も含め、今後も活用する機会は増えそうです。（中村武史）